

社 会 科

泊 和 寿
澤 田 兼 祐

1 社会科における見つけ直しのある聞き合い

社会科における
見つけ直しのある
聞き合いの姿

社会科では、子どもが社会的事象に関心をもって進んでかかわり、発達段階に応じて、それらの意味や働きを多面的・多角的に考え、公正に判断できるようにするとともに、子ども一人一人に社会的な見方や考え方が次第に養われるようにすることが求められている。また、子どもが社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を着実に習得し、それらを活用する力や課題を探究する力を身に付けていくために、各学年段階に応じて、習得すべき知識、概念や技能を明確にするとともに各種の資料を効果的に活用し、社会事象の意味などを解釈したり事象の特色や事象間の関連を説明したりするなどの言語活動を重視している。

社会認識≡人間
社会の有り様

社会科は、子どもが、いかに社会事象と出会いかかわりながら、言語活動を通して、事実認識を社会認識へと深めるかということのみならず、いかに価値ある学びを獲得していくかが大切になる。

学習指導要領改定
の共通事項

- ①基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得
- ②言語活動の充実（思考力判断力、表現力の育成）
- ③新しい課題への対応と社会参画
- ④社会的な見方や考え方の成長

なぜなら、社会科のめざすところは、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現をめざすなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することをめざしているからだ。

また、学習指導要領改定の共通事項を達成するために、様々な取り組みが行われているが、新たな課題が浮かび上がってきている。それは、習得のための習得、もしくは言語活動のための言語活動は行われるが、「新しい課題への対応」と「社会参画や社会的な見方や考え方の成長」の二点への成果が弱い点である。これは、学習指導要領改定の根幹に関わる、見過ごせない課題である。

よって、社会科における見つけ直しのある聞き合いの姿を、

社会的事象に関心をもって進んでかかわりながら探究する過程で 言語活動を生かして事実認識や社会認識を深め 知識や技能などを習得し 活用しながら 公民的資質の基礎を養っていく姿

とした。

学んだことは、使ってこそ身につく。本当の価値がわかる。将来に生きる力となる。明るい未来をつくる希望となり確信となる。

これからのより良き社会づくりを担い、勇気と希望と確信と喜びに満ち、不屈の精神でどんな難問にも勇敢に立ち向かって解決していく。現在、日本は、否、世界も、そのような人材を希求している。その期待にこたえる学びをめざしている社会科は、未来の希望である。

2 見つけ直しへと向かう状態

- (1) 社会的事象や事実の認識を確かにしたり深めたりする必要を感じている状態。【確かな事実認識】
- (2) 新たな問題意識が形成されていく状態。【新たな問題意識の形成】
- (3) 社会的事象を、比較したり、関連付けたり、統合したりしながら、事実認識を社会認識に深めていこうとする状態。【社会認識を深める】
- (4) 既習の知識や概念や技能を活用して、新たな学習問題にチャレンジしようと

- する状態。【発展的学習や確かな学びのために】
- (5) 学んだことを、より良い社会づくりや自分の生き方に生かしていこうとする状態。【実践力育成】

3 受けとめ合いを通して見つめ直すための手だて

(1) 確かな事実認識をもたせる工夫

- ① 子どもが、社会的事象の意味や事実を確かにつかみたいと思うような、子どもと教材との出会わせ方を工夫する。
- ② 資料について、「わかること」や「わからないこと」をじっくり読みとらせる。
- ③ 観察や調査活動を行う際に、観察や調査活動の視点や方法や見通しについて明らかになるように事前や事後の指導をする。
- ④ 見学や体験活動などを含めた調べ活動の後に、つかんだ事実を伝え合い、事実を確かめ合う場を設ける。
- ⑤ 学習問題を解決するために、事実認識の足りない点を「もう一度調べたい」という思いをもたせる。

(2) 問題意識が形成される展開

- ① 単元の初めに、学習計画を立てることで、学習の見通しをもって探究的な学習をさせていく。
- ② 社会的事象や既習の事実や各種資料などを比較して、「違い」や「変化」や「矛盾」に気付かせる。
- ③ 問題解決のために、新たな視点や資料や方法が必要であることに気付かせる。

(3) 事実認識を社会認識に深める工夫

- ① 事実を比較したり、関連付けたり、統合したりして、社会認識や社会的な概念が形成されるような学習問題にとりくませる。
- ② 社会認識をさらに比較したり、関連付けたり、統合したりして思考し、社会認識や社会的な概念を深める学習展開にする。
- ③ 板書や掲示物などを活用して、既習を想起したり、板書に位置付けたりして、子どもの思考や学びを視覚的に助ける。
- ④ 学んだことを分かりやすくまとめたり、まとめたことを伝え合ったりする学習活動にとりくませる。

(4) 問題解決力を育成する発展的学習

- ① 既習の知識や概念や技能を生かして解決に挑戦する、発展的な学習問題にとりくませる。
- ② 学びを再構築する必要がある学習活動にとりくむことを通して、既習を生かして知識や概念を再構成し、より確かな学びにする。

(5) 実践力を育成する学習活動受けとめ合い

- ① 学んだことを、自分の生活や生き方にどう生かすかを考えたり、実際に実践したことを交流したりさせる。
- ② 学んだことを生かして、自分たちなりに社会参画する活動にとりくませる。
- ③ 学習を支援してくれた方々や他者に、学びをフィードバックさせる。

4 実践例

(1) 確かな事実認識を持たせる工夫

① 3年生 「学校のまわりの様子」

子どもたちに観察の視点を与え、グループで話し合わせる活動を行った。提示した視点は「地形」「土地利用」「主な公共施設」「交通」「古くからの建物」である。これらの視点を明確にして調べ活動を行い、その視点ごとに学校の周りの様子を話し合うことで、手だてへの認識が深まると考えた。

導入で子どもに、学校の周りの様子について知っていることをそれぞれに話させたが、通学路で知っている個別の情報などがいくつか出てくるだけであった。そこで、まず屋上から学校の周りの様子を眺める活動を行い、各方位の様子について調べていくことにした。

屋上から周りを眺めると、北にはマンションのような建物が多く、南には山があり、東には自衛隊の駐屯基地、西は普通の住宅が多いように見えた。方位によって様子が違うことが伺えたが、建物にさえぎられてははっきりと分からなかったり、森なのか神社なのかははっきりしないところもあった。そこで、実際に調査を行うことにした。

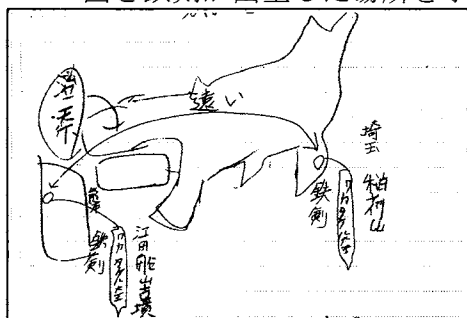
観 点	見つけたもの	様 子
1.地形 (平地、山地、台地、丘、川、海 など)	用水 丘 平地	用水 ⑤ 平地、ゆるい坂
2.土地利用 (住宅、商業、工業、田、畑、竹林、果樹園、荒地、公園 など)	甲樹園(山崎町) 住宅地(田原保の) 畑(代林公園) P(パーキング)	住宅(一軒家)多い 新しいマンション①
3.交通 (バス道、二車線、電車、高速道路、港、空港 など)	一車線	車通り少ない
4.主な公共施設 (公民館、区庁舎、学校、保育園、幼稚園、交番、消防署 など)		
5.古くからある建物 (寺、神社、石碑、城 など)	神社(50年前) 古い家(農家)な	古いものがいっぱいある いなか たくさんある じれ

資料1 視点を明確にした調査活動を行ったワークシート

学校の周りの調査は、ワークシートにメモを取りながら行った(資料1)。先の五つの視点を事前に与えておくことで白地図への書き込みが容易になり、まとめもしやすくなる。まとめ活動は、四人一グループごとに行った。小グループでの話し合いの場では、より多くの子どもが自分の気づきを話すことができる。その際、共通の視点について話し合うので、同じ気づきには「そうそう」と同調したり、違う気づきには「どっちが正しかったのだろう」と疑問をもち、確認し合う姿が見られた。このように、明確な視点をもって調べやまとめをさせることで、学校の周りの様子を明らかにすることができた。

② 6年生 「日本の国の統一」

日本国中にあった国がより強大な力をもつ国によって統一されていったことを、稲荷山古墳と江田船山古墳から発掘された鉄剣から考える授業を行った。提示した資料は日本地図と鉄剣が出土した場所を示したものである。黒板に日本地図を描き、埼玉県の稲荷山古墳から鉄剣が一本出土したと、熊本県の江田船山古墳からもう一本同じ大王の名前が彫られた鉄剣が出土した事実を提示し課題解決のための資料とした(資料2)。そして、課題をくばらばらだった国はようになっていったか>とし、二本の鉄剣からどんなことが分かるのかについて考えを出し合った。



資料2 板書で示された情報を書き写したノート

本時以前には、発掘物など具体物から当時の環境の様子や生活を想像する学習を行っている。本時ではそれに加えて“二箇所から出土した”という事実からどんなことが分かるのかについて考えさせた。

本時以前には、発掘物など具体物から当時の環境の様子や生活を想像する学習を行っている。本時ではそれに加えて“二箇所から出土した”という事実からどんなことが分かるのかについて考えさせた。

授業は「ワカタケル大王」と彫られた鉄剣がここ（埼玉）とここ（熊本）から出てきたことから何が分かるか」という問いから学習を始めた。資料3の記録のように、子どもは発言の連続によって、遠い距離を隔てた二箇所同じ名前が刻まれた鉄剣が出土したことから何が分かるかについて、考えを深めていった。二本の鉄剣が発見されたという事実から、治める領地の広さに考えが広がっていったのである。

A児：交流があった
 B児：二箇所ともワカタケル大王が治めていた
 C児：鉄剣を自分の領地に置いていった
 D児：国を一つ以上もっていた。だから、たくさん領地をもっていた
 E児：いろいろなところを治めていた
 F児：剣がぼろぼろになっているから捨てていったのではないか

授業後半では、具体物である鉄剣そのものに目を向け、何が分かるかを話し合った。きっかけは資料3のF児の発言である。その考えに対して「捨てていったのならいらなかったのか」と問い返し、子どもに意見を求めた。その後「大切なものだったと思う」という考えが多く出されたが、どうして大切だと判断したのか、他の子どもに対して説得力を持った考えを述べる子どもは出なかった。そこで、既習をふり返った。すると当時、鉄の精錬技術をもつ人はそれほど多くなく、鉄剣のように貴重なものを授けるというのは、授けられた者との間に身分の上下があるのではないかという考えが出た。また、文字が彫ってあることは渡来人との関係を示し、中国に使いを送った身分の高い人ではないかという考えも出た。そして、前述の関東地方から九州地方までの広範囲にわたる地域を治めた国があったことと合わせて、その国は優れた技術や文化をもっていたとまとめ授業を終えた。

資料3 話し合いから考えを深めた展開の記録

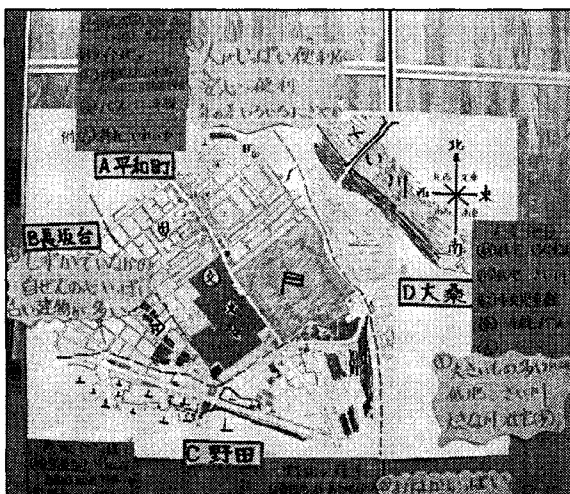
この実践のように目に見えない事実であっても、当時の様子を想像しやすい資料提示の工夫をすることによって、事実認識を深めていくことができた。学級では子どもがそれぞれの気付き（解釈）を伝え合うことによって以前の自分が気付いていなかった多くの事実を得ることができる。活動を通して子どもが考えを伝え合い、課題解決をしていくことが大きな喜びと達成感にもつながった。

(2) 問題意識が形成される展開

① 3年生 「学校のまわりの様子」

電子黒板を活用して、学校の東西南北の様子の違いに着目させた。子どもは各地域の様子が違う理由について、問題意識をもっていた。

学校の周りの調査の後、東西南北の四つの地域の様子を白地図に表した（資料4）。その地図を電子黒板に取り込み、気付いたことをペンで書き込む学習を行った（資料5）。



資料4 学校周辺の様子をまとめた地図



資料5 地域の特徴を書き込んだ電子黒板

授業者：平和町地区に多く見られるものはなんですか

A 児：平和町は 病院が多いです

B 児：お店も多いです

C 児：集合住宅も多いです

授業者：では 野田地区に多く見られるものは？

D 児：広い墓地があります

E 児：お墓がいっぱいあります 5万個です

(中略)

授業者：各地区を比べて「なぜ」と思うことはありませんか

F 児：野田地区はお墓ばかりなのはなぜかな

G 児：お年寄りが多いからかな

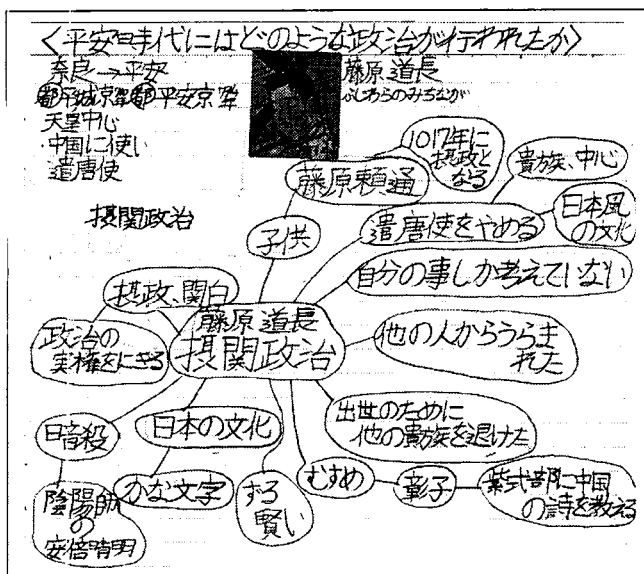
書き込みながら、自分の気づきを友達に伝え、地域の特徴的な様子を共有することができた。資料6は電子黒板を使った話し合いの様子である。

このようにして「平和町にお店や病院が多いのはなぜか？」や「野田地区にお墓が多いのは？」という新たな問題意識が生まれ、探究的な学習活動につながっていくことができた。

資料6 電子黒板を使った話し合いの様子

② 6年生 「藤原氏の政治」

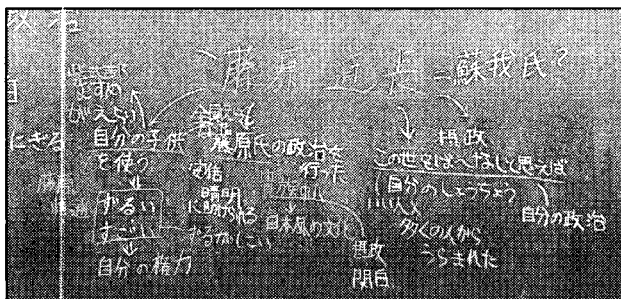
実践は古墳時代から平安時代にかけての単元学習で行った。マッピング形式を使った調べ活動の記録と板書を使ったまとめを組み合わせることで、人物や事柄について特徴的な事実を見出し、さらに深く理解するための疑問を生み出すことができた。



左は、「平安時代にはどのような政治が行われたか」という課題で行った授業の子どものノートである(資料7)。マッピング形式で人物をとらえる方法をとって、教科書などからわかった事実を書き写すだけでなく、自分がわかりやすくまとめている。マッピング形式を使うことによって、学習する人物に関する事柄などをキーワードとしてとらえ、記録することができる。同時に、事柄どうしの関連が一目で分かる。そこにマッピングの優れた点があると言える。

その後、それぞれの気づきを伝え合い、板書にまとめていった。子どもは自分の気づきを発表する際に、自分の思いや判断の根拠を交えながら話をした。摂関政治という言葉を発表する際に「出世のために娘を使うのはずるいと思います」などである。ノートのマッピングには表れていないが、発表の際に補った言葉を板書に書き加えることで、その子どものこだわりや事実に対する判断が語られることになる。すると、それを聞いた子どもから「ずるいけど そんなことを考えるのはすごいです」「ずるいというよりずるがしこいです」などと発表が続き、藤原

資料7 藤原道長について 事実を関連づけたノート



資料8 言葉を補って 関連付けた板書

道長の人柄や当時の女性の扱われ方などにも理解が広がるようになった(資料8)。そのように話し合いを行う中で、「天皇に娘を嫁がせることができるのはもともと藤原氏一族はかなりの力をもった人たちであったのではないか」などの疑問が出てきた。すると、再び調べ活動を行ったり、その疑問に対する話し合いが行われたりして、理解を深めていくことができた。

(3) 事実認識を社会認識に深める工夫

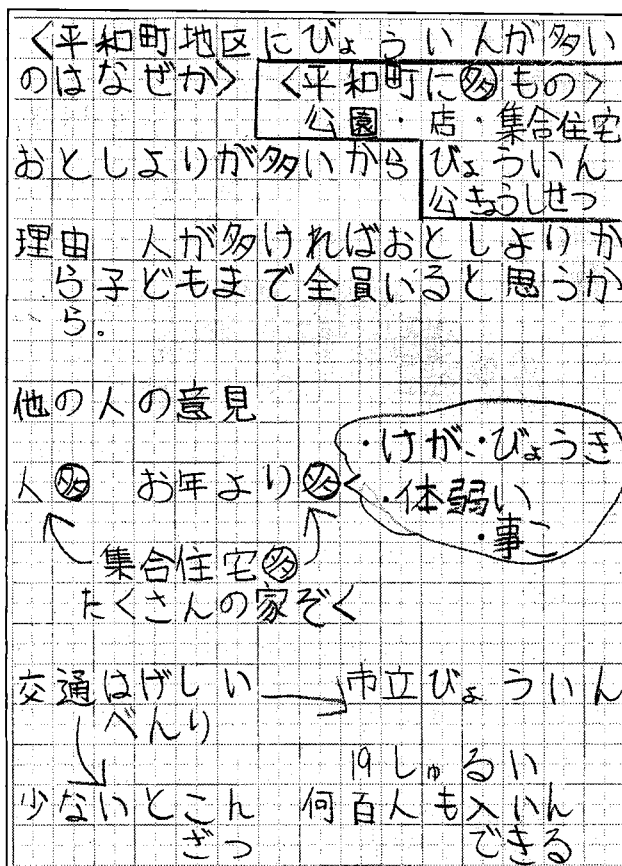
3年生 「学校のまわりの様子」

子どもが、既習の事実認識を社会認識に深めていけるように、観察調査活動の視点を生かして話し合う活動を行った。

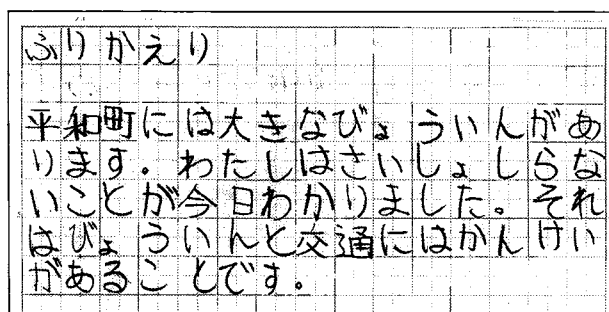
<平和町地区に病院が多いのは？>は、見学後に作った課題である。まず、学級で作った学校の周りの地図などから平和町にはいくつもの病院や店があることを確認した。その後、既習の事実をもとに立てた予想をノートに書き、それをもとにして話し合いを進めた(資料9)。

資料9の子どもは平和町にある病院やお店をお年寄りや子どもの存在に関連付けて考え始めた。そして、他の子どもの意見と合わせて、お年寄りがけがや病気になりやすいから病院があるのではないかと考えている。また、交通の便に着目して通院のしやすさや救急車で短時間に搬送するために広い道路が作られているのではないかと考えを深めている。そうやって「地形」「土地利用」「主な公共施設」「交通」「古くからの建物」の五つの視点から事実に関連付けて考え、話し合うことにより、「大きな病院と交通には関係がある」という社会認識を獲得していった(資料10)。

このように、視点や既習の事実に関連付けて考える授業展開を行うことによって、事実認識を社会認識に深めていくことができた。



資料9 多くの視点から考えを深めたノート



資料10 新たな社会認識を得たふりかえり

(4) 問題解決力を育成する発展的な学習

6年生 「聖武天皇の政治」

ノートにメモをしながら話し合い活動に臨むことで、課題に対して判断する力を育もうと考え、実践を行った。

授業は聖武天皇が行った大仏建立の是非について話し合ったものである。前時までには、聖武天皇が大仏や国分寺を建立しようと考えた理由について学習をした。同時に、当時の技術で大仏作りをすることの大変さや、どれほどの費用をかけたのかも理解した。聖武天皇が平和な世の中にするために大仏を建立したことは理解したが、それに対して、子ども一人一人がどのように考えるのかを賛成と反対の立場から、考えを述べ合うようにした。それまでの学習で得た知識を全て使い、その上で自分が考える最良の手段を決定していくことをめざした。考えの交流をする中でもノートに友達のことをメモしていくようにした。メモを取ることで、友達が優先することと自分が優先することの差に気付いたり、優先する根拠を理解したりすることができる。そして、自信をもって自分が最良と考える選択を話すことが出来るようになると考えた。このように単元の終わりに、それまでの学習で得た知識を全て

使い、課題に対する自分の考えを話し合うことによって、明確な事実認識と時代背景や環境の理解に裏づけられた判断する力を育めると考えた。

交流して...

賛成

- ・国を守るためにやるならいいと思う。
- ・協力できる。
- ・安心感がうまれるかもしれない。
- ・農民もがんばろうという気があった。
- ・命がけなのはあたりまえだと思う。
- ・大きい物を作ったことで、それほど平和にできる。
- ・皆でお金を合わせる。→大仏を作る。

反対

- ・費用や時間がかかる。
- ・け、こう命がけだから危険。
- ・逆に不安になっていく。
- ・死者やけが人も増えてしまう。
- ・資源の消費が大きい。
- ・たくさんの人(260万人ほど)を苦しめるかもしれない。

代案

- ・小型のものを作って各地におく。
- ・病人を助ける。
- ・大仏を石で作る。

資料 11 賛成と反対の両方の立場から考えや根拠を書いたノート

子どもには、まず自分の考えを書かせ、その後の意見交流にメモを取りながら参加するようにした。(資料 11)。異なる考えを分類して書くことで、考えを整理し、自分や友達の考えの根拠に優先順位をつけて最終的な判断をできるようにしている。

資料 11 の子どもは、最初に費用や時間がかかったとしても、大仏建立によって人々が得られる安心感を第一と考えて賛成の立場を表明していた。交流後には、農民の協力があつたから完成したことや、他の子どもの気付きから知った資料中の事実を踏まえて、やはり賛成の立場で「だから 費用や時間よりもやっぱり安心感 協力 平和にできるなどの方が大切なのかなと思う」とまとめている(資料 12)。

他の子どものまとめには、「不安をなくすために大仏を作っているのに倒れている人もいて逆に不安になりそう 多くの人が犠牲になるのは反対」と書いてあるのもあつた。これらのまとめの違いのように、同じ大仏建立の苦勞を根拠としても優先させることの違いによって、結果が全く異なることがあると体験できるのは子どもにとってよいことであると考えている。共通の理解があつても、個々の判断は様々であり、

どちらがよかつたと決められないことがあると知ることになるからである。

複数の立場から様々な根拠を示しながら判断したことを述べ合うことで、興味深く歴史を見つめ、同時に当時の社会への深い理解を得ることができた。過

まとめ

私の意見は(1) 大仏に賛成のままにした。理由は、やはり人々の安心感 農民たちの協力によって作り上げることができたものだから。大仏を作ったことには賛成だ。交流して、反対の人の意見(費用や時間がかかってくる)も、元分がたぶん、それでも資料集を見て、農民の「たちも、がんばろう」という気になっていたということが分かる。だから、費用、時間よりも、やっぱり安心感、協力、平和にできるなど、こちらの方が大切なのかなと感じた。

資料 12 自分の考えをより確かにしたふりかえり

去に生きた人物の判断について現代の私たちが考えることは、自分がこれから出会う様々な場面で、何を大切に判断するとよりよい結果につながるか考える力を育成すると考えている。

(5) 実践力を育成する学習活動

3年生 「学校のまわりの様子」「わたしたちの住む市の様子」

これまでの学習で得た学びを再構築し、積極的に社会参画に向かう心情を育むことをねらって授業を行った。東京から来た友達に、金沢の「どこ」を案内してあげるかを考える学習である。

自分の心に残った金沢市の様子を、ノートや掲示物を活用することによって想起し、それぞれの思いについて話し合った。この時、それぞれが根拠を明確にしなが、お互いのおすすめを伝え合うことで、学びの再確認をしたり、自分の思いと常に比べたりしながら話し合いに参加することができた。学校の周りの様子や金沢市の様子の地図が教室掲示にあることによって、実際の様子を思い出すことができた。最後に、もう一度自分が案内したいと思う場所を決めた（資料 13）。普段自分たちが暮らし、よく知っているはずの市だが、初めて来

(2)あなたは、東京から来た友達を金沢市観光につれて行くことになりました。どこへ行きますか。また、そこへ行く理由は何ですか。	のい
	(どこへ) 野(田)地区
	(理由) 前田家のまはか下(田)せまはかかアエクさん あるのかのわけをあとであげたいから。

資料 13 市内のおすすめの場所を考える活動を通して 学びの再構築を促すワークシート

るお客の立場を考えることによって、金沢市にしかない特徴を再認識することにつながった。その結果、機会があれば自分たちが住む市を紹介したいという積極的な心情を生み出し、私たちが住む地域への愛着や故郷を大切にしたいという心も育てることにつながられたと考える。

5 成果と課題

聞き合いによって、社会認識を深めていく学習に近付けられたのが大きな成果と言える。社会科で、事実を知るための資料の存在や体験活動は欠かせないものである。資料や体験そのものからわかることがあるが、それぞれが資料から考えたことを交流したり、既習と比較して気付いたことなどについて聞き合いを行ったりすることによって、より深く事実認識をすることができた。この時に、子ども全員が自分の考えをもって聞き合いに臨み発表することで、考えの相違点や共通点が明確になる。すると、その考えのもとになった見方や考え方の根拠に対して興味をもち、「その事実から判断したから違うんだ」とか「同じ事実を根拠としているけど、優先していることが違うから、違う結論になるんだ」と理解することにもつながった。この友達の共感を得ることや違いの理解が、自分の考えの妥当性を感じ自信を深めさせることや、友達に指摘された違いについてさらに調べたいと感じさせることにつながった。そうやって、常に自分の考えに照らし合わせながら学んでいくことで、多くの事実から考えを得ることができるようになった。資料や体験から分かったことを鵜呑みにするのではなく、その事実の根拠を予想し調べたり、気付いたことを発表し合ったりすることで着実に社会認識が深まっていった。

しかし、一方で聞き合いをしてもなかなかめざす価値のある学びに至らなかったこともあったのが課題といえる。授業者がその時間に子どもに身に付けさせたい知識や概念を明確にしていなければ、子どもは前の子どもの発言の内容と似た言葉を繰り返すことが多い。時間内に課題解決に至るには、必然性のある発言が続く効率のよさがなくてはならない。難解な課題に出会っても、主体性を失わず、過去の学習で経験した比較や類推することから考えるとといった思考法をどの子どもも身に付けることが必然性のある発言につながると感じている。発言が続くばかりで満足するのではなく、個々の発言に必然性が見られ、着実に課題解決に向かっていることに満足感を感じられる授業を構築できれば、かわりを通して知識や概念を得ることができるようになる。そのための手だてについて、継続して研究を進めていく。